

「ている」—いま・このカプセル化—

Here and Now: A Study of *-teiru* in Japanese

三原 健一*

MIHARA Ken-ichi

1. はじめに

日本語の「ている」は、(1a)の動作持続(動作の継続)、及び(1b)の結果持続(結果の残存)の意味で用いられるのが基本であると思われるが、その他にも、(1c-i)で列挙する様々な構文に現れる汎用形式である。

- (1) a. 太郎が走っている。(動作持続)
 b. 電灯が消えている。(結果持続)
 c. 私は健康のため、毎朝、公園を走っています。(習慣)
 d. シェイクスピアは多くの歴史劇を書いている。(効力持続=パーフェクト)
 e. その人なら、昭和33年9月1日に他県に転出しています。(記録用法)
 f. 拓也はおじいさんに似ている。(第四種動詞構文)
 g. 屋内はすべてバリアフリーになっています。(単純状態の「なっている」)
 h. 彼女は青い目をしている。「青い目をしている」構文
 i. ルート66は、シカゴとサンタモニカの間を走っている。(虚構移動構文)

本稿は、「ている」がなぜこのように広範な構文に現れるのか、という問題に対峙しての試みである。¹

まず、「ている」の中核的意味の確認から始めよう。

- (2) a. 太郎が走っていた。
 b. John was running.

(2b)の進行形について、Leech (1971)は、「限定的継続 (limited duration)」を表すと述べている。限定的継続とは、時間を区切つての継続という意味である。例えば(2b)であれば、私が見たその時は、ジョンは走っていた(が、他の時間帯については知らない)ということである。(2a)についても同じことが言える。その上で、(1a)の動作持続と(1b)の結果持続が、様々な用法がある「ている」の基本であり、さらに、動作持続の方がプロトタイプであると感

* 京都ノートルダム女子大学・客員教授

¹ 本稿の草稿段階で、益岡隆志氏、高見健一氏、及び2名の査読者の方々から非常に有益なご意見をいただいた。ここに記して謝意を表したい。

じられるとすれば、「ている」の基本義を限定的継続に求めるといふ、当面の作業仮説を立てることができる。

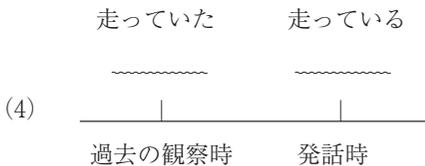
しかし、「時間を区切る」ということの本当の意味は何なのだろうか。本稿では、次節以降で(1)に列挙した構文を順次検討し、これらの構文群が、〈いま・ここ〉を中核として拡張したものであることを明らかにしたい。いわば、カプセル化された〈いま・ここ〉が、各構文の中枢部に埋め込まれているということである。

2. 動作持続と結果持続

まず、動作持続解釈となる(3)を見られたい。

- (3) a. 太郎が走っている。 / 太郎が走っていた。
 b. 花子が泣いている。 / 花子が泣いていた。
 c. 木の枝が揺れている。 / 木の枝が揺れていた。

非過去テンスであれ過去テンスであれ、「ている / ていた」は、その事象を観察した時点における限定的継続を表す。図式化すると次のようになる。



事象を観察しているのが発話時であるとき、観察者はその事象を眼前で見ているのであるから、限定的継続事象は、〈いま・ここ〉で起こっていることになる。観察時が過去であるときも、視点をその観察時に位置してみれば、限定的継続事象は〈いま・ここ〉で起こっている。

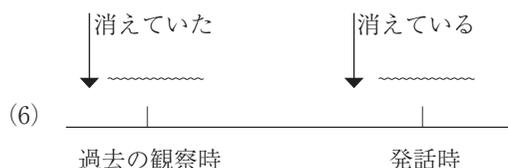
工藤(1995: 64)は、「シテイルは単なる〈継続性〉ではなく、〈同時=継続性〉を表すと考えなければならない」と述べているが、筆者は、これに〈同所=継続性〉も加えることとした。ここで言う〈同時〉〈同所〉とは、話し手(=認知者)が事象を観察している時点と同時ということであり、事象がその中に存在すると話し手(=認知者)が解釈している自己の世界(山本2005)と同所ということである。もちろん、「太郎は今頃、議事堂付近を走っているだろう」のように、現場を目撃しているかの如く想定している場合も含むものである。

次に、結果持続解釈となる(5)を見られたい。

- (5) a. 電灯が消えている。 / 電灯が消えていた。
 b. 革命軍兵士が死んでいる。 / 革命軍兵士が死んでいた。
 c. 田中君が今、研究室に来ている。 / 田中君がさっき、研究室に来ていた。

非過去テンスであれ過去テンスであれ、「ている / ていた」は、それ以前に起こった事象の結果状態の持続を表しており、「死ぬ」のような非可逆的事態でなければ、その結果状態がこの先も続くかどうかは観察時点では未定である。いま電灯が消えていても、1分後には点くかもし

れない。つまり、結果持続も限定的継続事象である。図式化すると次のようになる（下向きの矢印は「電灯が消えた」時点を示す）。



つまり、結果持続においても、限定的継続事象は<いま・ここ>で起こっているということである。

(7a) の習慣の「ている」は、広く見れば、事象が複数回反復されることを表す、(7b) の「複数事象 (multiple event)」の「ている」と同類である。寺村 (1984) が正しく指摘しているように、点として捉えられる個々の事象（「走る」「死ぬ」）などが複数集り、全体として線と捉えられるようになるものである。

(7) a. 私は健康のため、毎朝、公園を走っています。

b. アフリカでは毎年大勢の子供が栄養失調で死んでいる。

とすれば、(7a) は (3) の動作持続と同じであり、(7b) は (5) の結果持続と同じであることになる。つまり、どちらも<いま・ここ>の限定的継続事象ということである。なお、念のため記しておこう。習慣の「ている」は、「私は健康のため、毎朝、公園を走ります」のように「る」形でも言えるのだが、時間的限定表現を加えた「私は3年前から、毎朝、公園を走っています/*走ります」では、「ている」のみが適格となる。すなわち、「ている」の限定的継続動作に対して、「る」形は、時間の限定を外した汎時間的な習慣・動作を表しているのである。

3. 効力持続

効力持続の「ている」とは (8) のようなものを指す。

(8) a. シェイクスピアは多くの歴史劇を書いている。

b. 祖父は7年前に死んでいます。

この類型は、伝統的には「過去の回想」などと呼ばれてきたが、実際には過去の事態に限定される訳ではない。むしろ、工藤 (1995: 97-98) が挙げている次のような例を見ると、この類型が、英語完了相と完全に平行する分布をなしていることが分かる（工藤は「パーフェクト」という用語を用いている）。英語における対応構文の名称を括弧内に示す。

(9) a. あなたが家庭をもつ頃には、わたしはもうとっくに死んでいるわよ。

(未来完了相)

b. 私の父は、ガンで、もう死んでいます。(現在完了相)

c. 私が帰郷した時には、父は既に3時間前に死んでいた。(過去完了相)

(9a) (9c) のタイプは、それぞれ視点を未来と過去に移したものであり、そこで機能する原則

は (9b) の場合と同等なので、以下、(9b) タイプで代表させることにしたい。

この構文は、過去に起こった出来事を、現在と関連させて述べるような文脈で用いられることが多い。例えば (8a) であれば、シェイクスピアが多くの歴史劇を書いたことが、今話題にしていることと何らかの点で関連するような文脈、過去の事態が何らかの効力を現在まで維持しているような文脈である。例えば、英文学史の講義をしている場合などを想起されたい。簡単に言えば、「その効力について、いま問題にしている」ということである。これがくいま・ここ>の範疇に入ることは言うまでもないだろう。

ところで、(10) のような「た」形は「ている」と言い換えることが可能で、効力持続=パーフェクトの機能を持っていると言える。

(10) a. もう学校から帰っているんだろう。

はい、帰りました。(=帰っています)

b. この1年で随分、家がふえましたねえ。(=ふえていますねえ)

(工藤 1995: 128)

しかし、「ている」は、効力と共に持続を表す点で「た」とは異なる。効力持続の「ている」は、過去の出来事が現在の状況と関わっていることを示すために、「それで、いま（これから）どうする（なる）の」(工藤 1995: 132) と続き、「た」は、現在と切り離され、「それで、どうした（どうなった）の」(同頁) と続くのである。

そしてまた、(11) のような、「記録用法」と呼ばれてきた「ている」と、上で見た効力持続の「ている」との距離はさほど遠くないであろう。

(11) a. (帳簿を繰りながら) その人なら、昭和 33 年 9 月 1 日に他県に転出しています。

b. 彼は 10 年ほど前に芥川賞を受賞している。

寺村 (1984: 133) は、このタイプを「回顧的なテイル」と呼び、「過去の事実を、いま改めて確認し、ある現実の文脈の中でその意義を吟味しようとする心理を反映している」と特徴付けている (下線は筆者による)。この「いま改めて確認し」というのは、要するに、過去の事実をくいま・ここ>で検索しているということであろう。

4. 第四種動詞構文

「ている」構文の意味と動詞類型の相関関係については、金田一 (1950=1976) の先駆的な研究に始まり、現在に至るまでの長い研究史がある。よく知られているところであるが、金田一は、日本語動詞を (12a-d) の 4 種に分類した。

(12) a. 状態動詞：ある、いる、など

b. 継続動詞：読む、書く、降る、など

c. 瞬間動詞：死ぬ、壊れる、割れる、など

d. 第四種の動詞：そびえている、優れている、など

当節で取り上げたいのは、(12d)の第四種の動詞である（以下、本章では「第四種動詞」と呼ぶ）。

この動詞類型は、(13)のように、文末位置では常に「ている」を付けて用いられるという特徴を持つ。

- (13) a. この子はおじいちゃんによく似ている。
 b. この作品が一番優れている。
 c. 彼の態度はとても堂々としている。
 d. つぶ貝は、食感がコリコリしています。

金田一（再録版8頁）は、この類型を「時間の観念を含まない点で第一種の動詞（筆者註：状態動詞）と似ているが、第一種の動詞が、ある状態にあることを表すのに対して、ある状態を帯びることを表す動詞と言いたいものである」と説明している。第四種動詞が時間の観念を含まないかどうかについては、すぐ後で問題にしたい。

どのような動詞がこのタイプとなるかについては、砂川（1986: 37）に詳細なリストがあるので、これを挙げておこう（一部、ひらがなを漢字に改め、例を差し替えたものもある。また、括弧内の名称は各グループの意味特徴）。砂川は、寺村（1984）に準拠し、これらの動詞を「形容詞的動詞」と呼んでいる。

- (14) a. (外見) 角ばる、尖る、入り組む、～の形をする、～の色をする
 b. (感触) ざらつく、でこぼこする、つるつるする、すべすべする
 c. (性質) 優れる、際立つ、馬鹿げる、込み入る、ありふれる
 d. (態度) 堂々とする、飄々とする、超然とする、気取る
 e. (体格) がっしりする、ほっそりする、ぽっちゃりする
 f. (位置関係) 面する、沿う、(南に) 向く、隔たる、離れる
 g. (その他) そびえる、満ち足りる、連れる、似る、適する

要するに、広い意味での「様態」を表す動詞としてよいだろう。従って、「ザラザラする」「ツルツルする」「コリコリする」「あっさりする」「ひんやりする」など、様態副詞から作られる動詞も含まれることになる。

では、第四種動詞は、なぜ常に「ている」形で用いられるのだろうか。次の例を見られたい。

- (15) a. この子は、いまのところおじいちゃんに似ているけど、はたち過ぎたら変わっちゃうよ、きっと。
 b. あいつ、高校のときは成績がずば抜けていたのに、大学入ったらフツーになったなあ。

上例において波線で示した表現から明らかなように、これらの文は、永続する状態ではなく一時的状態を表している。つまり、前頁で引用した金田一（1950=1976）の言明に反して、時間の観念を含まないとは言えないということである。この一時的状態の意味が、「ている」の基本義「限定的継続」と響き合うことは言うまでもないだろう。影山（2012: 26）も、「彼は、普段

ところで、第四種動詞は常に「ている」と共に用いられるとされてきたが、「る」を用いる第四種動詞構文があることが影山 (2012) によって指摘されている。(19) を見られたい。

- (19) a. イタリア北部にはアルプスの山々がそびえる。
 b. 参道には、樹齢 250 年以上の古木がうっそうと茂る。
 c. 上海には超高層ビルが林立する。
 d. ロデオ・ドライブには高級ブランドの店が軒を連ねる。
 e. 熊本県東部には阿蘇山などの九州山地が横たわる。

(影山 2012: 24, 32)

これらは、「そびえている」「茂っている」などのように「ている」で置き換えることができるが、(20) の下線で示す時間限定表現を加えるとき、「ている」は可能だが、「る」を用いた文が非文となる。「そびえている / そびえる」を用いた文でテストしてみよう。

- (20) a. 上海には今まさに超高層ビルが {そびえている / *そびえる}。
 b. 信州には何千年ものあいだ 3000 メートル級の山々が {そびえている / *そびえる}

(影山 2012: 25)

これは (15) で見た現象と表裏一体のもので、「ている」を用いた第四種動詞構文が一時的状態を表す事象叙述文であるとすれば、「る」形を用いたものは、属性叙述文であることを如実に示しているのである。

知覚動詞補文の中に生じることができるのは事象叙述である、という Carlson and Pelletier (eds.) (1995) のテストを援用しても、「る」形を用いた第四種動詞構文が事象叙述でないことが明らかになる。知覚動詞補文とは、「～のを {見る / 聞く / 感じる / 写真に撮る}」などの「～」の部分に生起する従属節である。

- (21) a. 向こうの方に超高層ビルが {そびえている / *そびえる} のを見た。
 b. 目の前に 3000 メートル級の山々が {そびえている / *そびえる} のを写真に撮った。(影山 2012: 26)

そして、第四種動詞構文の<いま・ここ>性にとって重要な事項がもう一つある。西田 (2005:14) は、「ル形とテイル形の意味の違いを分析するには、動詞のアスペクトに加え、話し手と聞き手の関係を考慮する必要がある」と指摘し、第四種動詞の「ている」は、「発話の場面に聞き手がいて、その発話により話し手と聞き手が同じ状況を指すことが想定されている」と述べている。ただ、必ずしも同じ状況を見ている必要はなく、同じ状況を頭の中で想像している場合もあるだろう。

次例を見られたい。第四種動詞構文で「ている」を用いる場合、聞き手の存在を前提とする終助詞や丁寧形が可能という例である (下記例は、西田 2005: 4 の例を参考にした)。

- (22) a. ほらごらん、向こうに駒ヶ岳が {そびえているよ / *そびえるよ}。
 b. ごらん下さい、向こうに駒ヶ岳が {そびえています / *そびえます}。

つまり、第四種動詞構文での「ている」形は、発話の場面に聞き手がいることが想定されてい

るが、「る」形は、聞き手を想定していないということである。このことから、第四種動詞構文で「る」形を使うのは主に書き言葉で、事典、美術書、旅行ガイドなどの見出し付き解説文でよく使われる（西田 2005）という使用上の偏りが観察されるのである。西田（2005: 1）の例を挙げておこう。

- (23) a. 千手観音座像（峰定寺）丸顔が円勢風をよく継いで、円信作の可能性のある西大寺十一面観音像に似る。
 b. 駒ヶ岳（雫石町）火口壁の外側、男岳北方には阿弥陀池を挟んで寄生火山女目岳がそびえる。

いずれにせよ、第四種動詞構文での「ている」形は、〈いま・ここ〉性を具有した形式であると言えよう。

5. 単純状態の「なっている」

当節では、佐藤（1999）が「単純状態の「なっている」」構文と呼んでいる構文について、簡単に見ておくことにしよう。次のようなものである（文例は筆者による）。

- (24) a. 屋内はすべてバリアフリーになっている。
 b. ここから先は立入禁止になっている。
 c. 怪我をしないように先が丸くなっています。

佐藤は、この構文は「捉えられた状態に対する解釈」（8頁）を述べる文であり、従って、問題となる状態の原因・理由、機能、構成などを解釈する文によく使われるとしている。

- (25) a. (高い木の葉を食べられるように) キリンの首は長くなっている。
 b.?? あの人の首は長くなっている。

- (26) a. この携帯用のカメラはとても軽くなっている。
 b.?? 太郎の体重はとても軽くなっている。（佐藤 1999: 8-9）

(25a) は、キリンの首が長い原因・理由の解釈を述べた文として読めるし、(26a) も、携帯用のカメラに必要な機能の一つ「持ち運び性」について述べた文として読める。ところが、(25b) のような、ある人の首が長い原因・理由を解釈するという状況は想定し難いし、(26b) も同様だろう（太郎がボクサーなどの場合は (26b) が言えるだろうが、このときの「なっている」は単純状態ではなく、減量した結果という意味での結果持続である）。²

筆者の見るところ、単純状態の「なっている」は、「いま、眼前で観察を行っている」ことを表す表現ではないかと思われる。(27a, b) において下線で示した表現を付加し得るからである。

- (27) a. すごいな、屋内はすべてバリアフリーになっている。

² 査読者からご指摘いただいた次の例は言えるが、これは、「目的性」が読み込めるために、(25a) に類する文に変換されているからであろう。

(i) 酋長族の女性は、美しく見せるために首が長くなっている。

b. 見ろよ, ここから先は立入禁止になっている。

とすれば, 単純状態の「なっている」構文も, <いま・ここ>の範疇に収まる構文であることになる。

6. 「青い目をしている」構文

本稿では, (28) のような構文を, 佐藤 (2003) に倣って 「青い目をしている」構文」と呼ぶことにする。

(28) a. メアリーは青い目をしている。

b. 花子は細くて美しい手をしている。

c. 太郎はいい度胸をしている。(佐藤 2003: 20, 23, 26)

この構文の最初の指摘は影山 (1980) かと思われるが, 幾つかの制限の下に成立する構文である。例えば角田 (1991) は, 修飾語がないと成立しないことを指摘している (文例は影山 2004: 31 による)。

(29) a. *彼女は {目 / 髪 / 声} をしている。

b. 彼女は {澄んだ目 / 長い髪 / 美しい声} をしている。

また, 定性制限が適用され, 「その」で限定したり, 代名詞「それ」で置き換えたりすることができない (影山 2004: 23)。

(30) *彼女は {その澄んだ目 / それ} をしている。

定性制限が適用されるということは, 例えば, (28) での「目 / 手 / 度胸」には指示性がなく, 生成文法で言う DP ではなく NP であることを示唆している。³

さて, (29) で見た修飾語の制限であるが, 興味深いことに, 形容詞 + 名詞と意味的に等価な複合語では文が成立しない。⁴

(31) a. 彼女は {美しい肌 / *美肌} をしている。

b. あの人は {短い足 / *短足} をしている。

c. 彼は {長い髪 / *長髪} をしている。(影山 2004: 32)

³ DP とは, 冠詞などの決定詞 (determiner) を主要部とする句で, この分析方法に依れば NP は D の補部ということになる。

(i) [_{DP} [_D the]_{NP} book]]

ここにおいて, NP の定性 (definiteness) を決定するのは, DP 主要部の「D」である。

⁴ 査読者から「長髪をしている」はさほど悪くないというご指摘を受けた。このことについては影山 (2004) にも報告があり, インターネットで次のような例が見られたという。

(i) a. うさぎは赤目をしている。

b. あの人はだんご鼻をしている。

c. 彼はビール腹をしている。(影山 2000: 35)

筆者は, 影山と同様にこれらの例を不適格と判断するが, ある程度は許容する話者がいることは確かのようなのである。

さらに、(30)の定性制限であるが、「その」や「それ」を用いることができないということは、形容詞+名詞の総体が旧情報であってはならないということである。が、上で述べたように、「目」「手」「度胸」などの名詞部分がDPではなくNPであるとすれば、そもそも指示性がないのだから、旧情報とも新情報とも関係がある筈がない。とすれば、新情報であるのは形容詞部分であることになる。

このような一見奇妙な制限は、この構文が、形容詞+名詞の形容詞部分を新情報として、話し手が<いま>伝えることを表す構文だからだと考えると理解し易いだろう。そうであるから、形容詞+名詞という2つの部分が必要なものであり、「美肌」などの複合語ではこの機能を担えないのである。

<いま・ここ>性のもう一つの特徴、<ここ>については次例で説明しよう。

(32) a. あれ、メアリーは青い目をしているのか。

b. いや、メアリーは、茶色ではなく青い目をしています。

(32a)では、修飾表現「青い」が示す状態を、いま初めて<ここ>で観察していることを表している。他方(32b)では、話し手と聞き手が共にメアリーの姿を思い浮かべ、想定された<ここ(そこ)>でメアリーの目の色について話している状況が思いつくだろう。「青い目をしている」構文も<いま・ここ>性に則った構文なのである。

7. 虚構移動構文

虚構移動構文とは次のようなものである((33)は元の例では「そのハイウェイ」「その山脈」となっている)。

(33) a. このハイウェイは東京から新潟へ走っている。

b. この山脈は南北に走っている。(松本 1997: 207)

上記のような構文は、研究者によって様々な名称で呼ばれているが、本稿では、他の類似構文と併せて「虚構移動構文」と呼ぶことにしよう。ちなみに、「虚構移動(fictive motion)」はTalmy(1996)の用語である。

この構文の奇妙な点は、ハイウェイも山脈も自らは移動しないものであるのに、「走っている」という移動動詞が用いられることにある。しかし、少し考えてみると、(33a)では、言語化されていない認知者が、ハイウェイで車を走らせながら助手席に座っている人に説明している姿が目につくだろう。あるいは、地図を見ながら視線を「走らせている」姿でもよい。(33b)でも、認知者が飛行機で山脈上を飛んでいる姿や、地図を見ている姿が思いつくだろう。いずれにせよ、移動しているのは、主語が示す実体ではなく認知者なのである。

虚構移動構文は、(34)のように「る」形でも可能であるが、この場合、時間や場所を限定する表現を伴う。松本(1997: 212)の「その道は{海岸沿いを/まっすぐ}走り始めた」の例も、筆者には、(34)の下線部と同様に「そこから」などの限定表現が必要なように思う。

- (34) a. そのハイウェイは海岸沿いをしばらく走る。
 b. そのハイウェイはそこでカリフォルニアに入る。
 (松本 1997: 209-210)

それに対して、「ている」を用いた (33) ((35) として再掲) では、時間や場所を限定する表現が必要ない。ここでは、限定的継続を表す「ている」が「限定」の機能を担っていると考えられるのである。

- (35) a. このハイウェイは東京から新潟へ走っている。
 b. この山脈は南北に走っている。

虚構移動構文は、虚構移動の一時的継続を表し、物体の位置や範囲を<いま・ここ>で伝える機能を有する構文だと言えるだろう。

8. 結語

本稿では以下のことを論じた。

- ① 「ている」の基本義は、時間を区切った継続、すなわち限定的継続 (limited duration) である。
- ② この基本義の源は、認知者がいま事象を観察し、そして、その事象が認知者の世界 (= ここ) の中に存在することを、<いま・ここ>にカプセル化する認知過程にある。
- ③ 日本語では、「ている」を用いたこの認知過程が、<いま・ここ>性を共有する様々な構文に現れる。

参考文献

- Carlson, Gregory N. and Francis Jeffrey Pelletier (eds.) (1995) *The Generic Book*. University of Chicago Press.
- 影山太郎 (1980) 『日英比較 語彙の構造』松柏社。
- 影山太郎 (2004) 「軽動詞構文としての「青い目をしている」構文」『日本語文法』4 巻 1 号。
- 影山太郎 (2012) 「属性叙述の文法的意義」影山太郎 (編) 『属性叙述の世界』くろしお出版。
- 金田一春彦 (1950) 「国語動詞の一分類」『言語研究』第 15 号。[金田一春彦 (編) (1976) 『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房に再録]
- 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト』ひつじ書房。
- Leech, Geoffrey N. (1971) *Meaning and the English Verb*. Longman.
- 松本曜 (1997) 「空間移動の言語表現とその拡張」中右実 (編) 『空間と移動の表現』(日英語比較選書 6) 研究社出版。
- 西田光一 (2005) 「恒常的状态を表す日本語動詞の語用論的分析」『語用論研究』第 7 号。
- 佐藤琢三 (1999) 「ナツティルによる単純状態の叙述」『言語研究』第 116 号。
- 佐藤琢三 (2003) 「「青い目をしている」型構文の分析」『日本語文法』3 巻 1 号。
- 砂川有里子 (1986) 『する・した・している』(寺村秀夫 (企画・編集) 日本語文法セルフ・マスターシリーズ 2) くろしお出版

Talmy, Leonard (1996) Fictive Motion in Language and “ception”. In P. Bloom et al. (eds.) *Language and Space*. MIT Press.

寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味 II』 くろしお出版.

角田太作 (1991) 『世界の言語と日本語』 くろしお出版.

山本雅子 (2005) 「テイル形式の認知的意味」『愛知大学 言語と文化』 No.13.